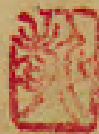


# ホトトギス

二月号

ホトトギス

昭和二十二年二月二十八日印刷  
今月二卷二月一頁発行  
編集主任 藤田 武  
発行所 東京 丸の内 丸の内 丸の内



## 風雅の小筥〔二十五〕

廣太郎

令和二年二月号という事で、このコーナーも先月から三年目に入っている。平成三十一年一月号は、このページを借りて汀子名誉主宰の恙の報告であったので、この番号は月数と一致しないが、これをお読みになった読者の方々からは多くの御意見等を頂き嬉しい限りである。本当にありがとうございます。これからもどしどし御意見を頂ければと思う。

今回は漢字の熟語の読み方について、確かに俳句は五・七・五という決められた音の中でリズム良く纏めなければならぬ。勿論ある程度の句跨りは却って効果的である場合もあるが、その中で漢字の熟語を使う場合、例の一つとしてホトトギスでも結構御投句が現在でもあるが、「戦友」「旧友」「親友」という熟語を総て「とも」と読ませるような句がある。俳句の十七音の中でそのまま読ませると「せんゆう」「きゆうゆう」「しんゆう」となり、かなりの字余りになってしまう。実はある総合誌の選をしていた時「戦友」という語に振り仮名を「きさま」と打たれている方がおられ、これは恐らくかの有名な軍歌の歌詞からと想像出来るが、このように極端になり過ぎる可能性もあり、やはり基本的には勧められないと思う。ただ逆の場合、こちらもある方が雑誌に書いておられたが、伝統派は「娘」という字を「こ」と読ませてはいけないと聞いた、というのである。少なくともホトトギスでは、私も当り前に「吾娘」は「あこ」として句作しており、そこまで厳しい事は無い。臨機応変、というのも語弊があるのかも知れないが、やはり言葉は時代と共に変化する事も事実ではある。

旬日記 汀子

平成三十一年二月二日 芦屋ホトギス会

悲しみの消えぬ残雪深き地に  
放談を終へたる二月礼者かな

二月三日 下萌句会

白梅の香り初めしと客を待つ  
腰痛も健康のうち梅日和  
午後雨の予報もつとも梅香る

二月四日 ロイヤル俳壇

梅が香に誘はれしごと会場に  
薄氷に光の失せてぬし水面  
油断してならぬなほ春浅きこと  
梅が香を辿り所在を問はずとも  
春浅し一喜一憂する勿れ

二月八日 工業倶楽部

薄氷のいつかほどけてぬし水面  
風に乗る紅梅の香の道ありて

二月十二日 大阪倶楽部

我が家にも二十二本の梅林  
鶯の便り待たるる吉野山  
さりげなく二月礼者となりけり  
雪降つて欲しい積もつてほしいなど

二月十二日 綿業倶楽部

甘く見てならぬ余寒につかまりし  
癒えたまへ薄氷は解けはじめたる  
何となくつかまつてぬし余寒かな  
子の興味失せて消えたる薄氷

二月十四日 清交社

まだといふこれからといふ春浅し  
配られてバレンタインの日なけり  
薄氷に通り過ぎたる日のかけら  
すつきりと晴れぬ一日や春浅し  
消息に一喜一憂春浅し  
薄氷の消えて通学路となりぬ

二月十五日 アネモネ句会

東京の春の雪とてもう止みし  
悲しみの春の雪国発たれ来し  
薄氷の消えぬし水面午後の客  
チヨコレイトバレンタインの日の名残  
二月十七日 淡路島ツアー吟行

一日は春めく島の旅となる

二月十九日 有恒俳句会

結局は春寒かこつ日となりし  
島の春訪ひし昨日のはや遠し  
春寒の一日を誘ふ朝の雨  
白梅の咲き継ぐ家居つゞかざる  
予定表よりほころびて行ける春  
又戻ること承知よあたたかし

この雨に香を失ひし梅白し  
二月十九日 無名会

麗かな昨日の旅のはや遣し  
梅二月正面の門開きけり  
春寒の旅の予定は控へ目に  
春寒の雨の家居となりけり  
旅うらら終へたる雨の家居かな  
島日和昨日は遠し春の雨

二月二十日 夏潮句会

猫柳河原に降りて行く径  
消息を問へば満開庭の梅  
病む友の消息問ふも梅が香に  
雲行に一喜一憂梅の客  
晴れて行く明るさ得つつ梅日和  
梅日和とは曇りても晴れぬても  
湖日和たたへ義仲忌なりしこと  
二月二十日 時雨句会

早朝の旅の春寒諾へる

春寒を押して来られし人ばかり

早々と雛を飾りて旅立ちぬ

二月二十八日 きさらぎ会

春寒を伴ひ来たる雨の旅  
春寒くとも明るさを頼りとす  
早立ちの春寒ほどけゆきにけり  
留守の戸を開け春寒に踏み入りぬ  
遠くより見て近く見て犬ふぐり

# 廣太郎句帳

## 廣太郎

平成三十一年二月二日 芦屋ホトギス会

残雪の富士蒼々と日を弾き  
葉牡丹に羽音道草食うてをり  
子を宿し二月礼者の吾娘来る

二月三日 野分会芦屋例会

■(魚箴) 汲む瀬戸内海を引き絞り  
億年の山の流転や木の実植う

二月三日 青嵐会芦屋例会

佳人来る春一番を掻き分けて

片栗の花に斜面の喜び

片栗の花の香法衣絡めつつ

身籠りし吾娘背を押す春一番

二月四日 カトリック新聞選者吟

寒牡丹祈りの声に開き初む

二月五日 むさし野吟行会

木鉦に旧正月の響き乗せ

法灯のゆらめきにある余寒かな

二月七日 蕉心会

朝霞ビルの輪郭失へり

水尾といふ春めく白さありにけり

春光を弾きて浮子の動かざる

あたたかく船のエンジン音喘ぐ  
船音の遠ざかりゆく暖かさ  
水温む三センチほど波立たせ

二月十五日 廣邦会

白梅に館の歳月改る

落椿蕊に魂宿しつつ

梅の花日差に研がれゆく白さ

釣うちら売るほど竿の並べられ

二月九日 「河内野」新春を寿ぐ会

旧正の過ぎて都心の銀世界

春の雪積り始めし江戸を発ち

一時間遅れて伊吹山笑ふ

二月十一日 朝日カルチャー若草句会

京菊菜添へて一品香り初む

公魚の穴釣湖面弾ませて

春菊に松阪牛の喜び

日を弾きつつ公魚の宙を舞ふ

余寒から余寒へ列車遅れつつ

公魚の湖凸凹にして釣られ

駅前之余寒に君を待ちぼうけ

二月十二日 「ひろそ火」百号祝句

春光に輝き増せる祝ぎ心

二月十四日 土筆会

ビル街の目覚は早し春の霜

朝光を弾き返して春の霜

富士は富士伊吹は伊吹雪残る  
残雪を六甲一風烟せて

鶯に都心の空気入れ替る

有明の朝日傾け海苔を掻く

二月十五日 北國文芸選者吟

余寒てふあなたへの片想ひかな

二月二十日 角川「俳句」十六句

木の実植う山の未来を信じつつ

江戸前の引きの強さに鱸釣る

天井画旧正月の視線かな

旧正に古刹を訪ふも縁かを

旧正の読経のリズムありにけり

香煙を纏ひつつ梅開き初む

餌を撒き釣師長閑に竿並べ

鳥は餌を人は魚を狙ふ春

温む水水底の石磨き上げ

君を待つ二時間といふ余寒かな

残雪に陸奥の景改る

春の霜こども都心の一等地

洲浜草季節動かしをりにけり

海苔筏に東京湾の狭められ

鶯や里に山気を響かせて

二月二十一日 前議員句会

平成の風梅林を磨き上げ  
下萌や地球の息を吐くやうに

二月二十一日 登高会

磯竈五人育てし媪かな

初音聴く川の流れを序曲とし

浅き春遠山色を解き初む

初音聞く六甲風遠ざけて

鶯に都心の空気洗はるる

永田町霞ヶ間も春浅し

二月二十二日 六甲会

鶯に里の表情改る

湖風の読経に和して義仲忌

三井の鐘届く山門義仲忌

あたたかき虚子の誕生日に合点

大琵琶に水嵩足して義仲忌

俳碑の文字梅が香のなぞりゆく

義仲忌君こそ僕の巴かな

鶯や母の過信を窘めて

二月二十四日 青嵐会東京例会

紅梅の黙白梅の騒きかな

あたたかき日差に雀弾かれて

梅が香に名苑の朝動き初む

句座といふ縁にありて義仲忌

木の実植う地球の自転確かめて  
鱻釣る水の分子を掻き分けて

鯿てふ釣らるるためのおちよぼ口

木の実植う嫁がせる日を思ひつつ

憍むより鱻の引きと判るまで

二月二十六日 若水句会

光陰を身近にしたる睦月かな

平家村鶯哀史語るかに

人のみにあらぬ恋路や睦月尽

枝騒ぐ鶯笛を聞きてより

春菊の火加減違ふ夫と妻

京菊菜香のはんなりと運ばれし

二月二十七日 目黒学園句会

盆梅の三百年を地に還す

盆梅の幹くれなみに暮れ初むる

午祭とんび輪を描く昼下り

盆梅を日差もろとも取り込み

深川は芭蕉のまほら午祭

二月二十八日 静の会

一輪の梅に昨日を遠くして

梅園に二人の影の吸はれゆく

梅に来て羽音は楽と変りゆく

二月二十四日 野分会東京例会

# 雑詠 廣太郎 選

毎日を今日が最後と秋の蟬 岡山伴 明子  
 秋蟬のまだ鳴く夫の生きてをり 同  
 秋草に日差し揺るる日夫葬る 同  
 アトリエの風入れ替へて葉月くる 渋川 木暮陶句郎  
 蒼き黙深めて露の山上湖 同  
 その中に息を殺して吾亦紅 同  
 枝豆へマニキュアの指せはしなく 東京 川口利夫  
 独り酌む淋しさに添ふ月見豆 同  
 枝豆や余生なる身をいとほしみ 同  
 己が闇仕上げて萩の盛りかな 香川 湯川 雅  
 遠近を確かにしたる昼の虫 同  
 正面の雲の動かず秋高し 同  
 極暑耐ふ老の力の緩むなく 相模原 木村享史  
 虚子の声覚えてますと生身魂 同  
 四世代読み継ぐ一書原爆忌 同  
 すぐ分かる花となりしよ曼珠沙華 熱海 嶋田一歩  
 富士へゆく道でありけり曼珠沙華 同  
 吾あるがゆゑに今あり曼珠沙華 同

蟪蛄の贅を食みつつ祈りつつ 神戸 山田佳乃  
 冷やかに手の上にある予定表 同  
 桃を切るとき息つめてをりにけり 同  
 形変へ光を変へて月今宵 袋井 湖東紀子  
 草々は眠りに入りぬ月の庭 同  
 ざらざらと日は衰へず鶏頭花 同  
 蘆さわぐ鶴塚橋に何かある 神戸 藤井啓子  
 睫毛よりひとつぶこぼれたる秋思 同  
 小川ならまだ跳べるはず野菊晴 同  
 水を見て露けきことば交はしけり 熊本 岩岡中正  
 秋水の底より一句湧くごとし 同  
 初鵬にひろがつてゆく水輪かな 同  
 澄む水に舞台化粧を落しけり 神戸 和田華凜  
 小道具もメイクも自前村芝居 同  
 穂芒の風に始る戯画絵巻 同  
 大仏の螺髪黒ずむ寒露かな 東京 田丸千種  
 大仏の胸に岐るる秋の風 同  
 径ならぬ径禅林にゐるのこづち 同  
 農耕車 優先道路越の秋 同  
 秋の旅昨日五十六今日良寛 同  
 大久保白村  
 佐渡見えず朱鷺をよく見て旅の秋 同  
 曼珠沙華だけが覚えてゐる小道 同  
 龍ヶ崎 今橋真理子  
 蜻蛉に水をたたへし如く空 同  
 蜻蛉の消えたる空のはたと暮れ 同

# 雑詠句評（二月号より）

海夕焼山夕焼となりて消ゆ 熱海 嶋田一步

津波跡しるき山内露けしや 長岡 安原 葉

海に面した少し高台の自宅の窓から華やかな夏の夕焼けを毎日  
見ておられるのであろう。

雨後の夕焼けが一番華やかで、落日の太陽は海原や雲を茜色に  
染め水平線近くになると一気に沈む速度を速める。

その日没を惜しむが如く夕焼け雲は何度迄も茜色に染まって海  
に突出し た半 島の影を濃くするのである。やがてその茜色も  
鎮まる頃に漁火が沖に輝くのであろう。

風光明媚な海の見える場所にお住まいになって居られる、作者  
の日々の心に湧く詩情の一端が伝わって来る。（静龍）

東京等平野の広い場所ではなかなかこの景には出会えないと思  
うが、作者のお住まいの熱海ではやはり海と山が近くにあり、こ  
の情景が目の前に拡がるのだらう。先ず海が夕焼で色付いて、時  
間の経過と共にそれが山に移り、最後に消えるところまで表現し  
たところに迫力を感じる。（廣太郎）

この度の水害で津波跡も明らかな山内はすべて無であり露らし  
く虚しい風景であったと云うことであろうかと云う詠嘆の情を現  
した一句である。（保佳）

令和元年度の東北ホトトギス俳句大会の吟行地は松島の瑞巖寺  
もメインの一つであった。そこを訪れた作者である。先の東日本  
大震災では、松島の複雑な地形で、津波は軽微であったと伝えら  
れてはいるが、それでもこの瑞巖寺の境内まで津波が来た。それ  
を悼んだ作者の心が清く伝わってくる。（廣太郎）

天地有情

日子選

露けしや一と日の家居また旅へ  
 震災に耐へて露けき堂柱  
 蒼天へ溶け込む一枝より落花  
 万象が落花に埋もれゆく刹那  
 敬老の日のまだ寄附をするところ  
 敬老の日の運勢を確めて  
 暑き日に熱く語りて虚子のこと  
 幸せと思ふ一杯目のビール  
 冷やかな手よりおつりを貰ひけり  
 冷やかにして美しき横顔よ  
 一木となるまで佇ちて露けしや  
 背ナといふ露けきものを見てゐたる  
 小鳥来てゐるとも知らず庭に出し  
 端山まで小鳥の降りて来し気配  
 変はる名を追ひかけ月と飽かず居て  
 父母深く知る人と居て十三夜  
 鯛の六甲思ひ病床に  
 波音を消す特急車須磨の月

長岡 安原 葉  
 同 同  
 東京 稲畑廣太郎  
 同 同  
 神戸 後藤比奈夫  
 同 同  
 相模原 木村享史  
 同 同  
 我孫子 副島いみ子  
 同 同  
 熊本 岩岡中正  
 同 同  
 神戸 三村純也  
 同 同  
 宝塚 水田むつみ  
 同 同  
 神戸 千原叡子  
 同 同

高御座しつかと継がれ菊日和  
 夫逝きて十年の冬立たむとす  
 稲架組みて伊那の星空深くなる  
 新参も古参も旬友濁酒  
 萩むらへ集まつてゆく風の道  
 一人ゆく花野の風に染まりつつ  
 穴まどひ吾も巳年の卒寿かな  
 月仰ぎいつしか胸に棲みし人  
 名月と窓辺に走る人の亡く  
 満月と呼ぶ声のなき窓辺かな  
 颯風に目覚めて窓の音を聞く  
 颯風の心へのりて走りたく  
 秋暑し独り住まひの殊更に  
 住み古りし仮設にありてつづれさせ  
 栗落ちる音に目覚めし荘泊り  
 石積みし遊女の墓や野菊道  
 対向車なく霧ごめの山路かな  
 かりそめの世吐に燃えたちぬ曼珠沙華

東京 今井千鶴子  
 同 同  
 神戸 和田華凜  
 同 同  
 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 同 同  
 東京 笹倉 潤  
 同 同  
 河野昭彦  
 同 同  
 福山 竹下陶子  
 同 同  
 仙台 赤川誓城  
 同 同  
 東京 大久保白村  
 同 同  
 山田閨子  
 同 同